

「朝顔やつるべ取られてもらひ水」。江戸中期の俳人、加賀千代女の代表句とされる。アサガオは秋の季語だが、夏の朝のサブライズ体験と見る方が親しみやすい▼アサガオはサツマイモと同じくヒルガオ科の植物。奈良時代に遣唐使が中国から日本に持ち込んだ。種子に下剤や利尿剤の効果があり、薬用として重宝された▼江戸時代になると観賞用の鉢栽培が人気を呼び、下級武士たちは「変わり朝顔」という品種改良の内職に精を出した。その結果、新奇のアサガオが次々に生まれた▼ボタンのような八重咲き、キキョウのように花弁が割けたもの、さらに大輪や珍しい黄色など、その数1千種以上に及び、

越山若水

2017.8.7

いずれも高値で取引された。残念ながらその多くは失われてしまったという▼そして何よりも仰天するのは、現在のバイオテクノロジーを駆使しても再現が難しいこと。さらに劣性遺伝子の掛け合わせをメンデルの法則の公表に先駆けて実践していた▼江戸のサムライの傑出した頭脳と技術力。日本人は実は偉大な植物学者、遺伝学者だった(稲垣榮洋著「身近な花の知られざる生態」PHP研究所)▼世界に名をはせた技術大国・日本の原点を見る思いである。その伝統の継承はさておき、花鳥風月を愛でる風流心は今も顕在だ。きょう立秋、細見綾子が詠んだ一句を思い出す。「朝顔に水やりしあと月待ちし」